

人は、  
人によって 傷つき  
人によって 癒される

2010（平成22年）1月

新年を、迎えられましたこと、おめでとうございます。

もちろん、この法話をご覧いただく方の中には、誰か大切な方を亡くされ、悲しい気持ちで新年を迎え、とてもおめでとうなどという気分にはなれない、と感じる方のいることも承知の上で、おめでとうと申し上げました。しかしその悲しみの涙を流すことは、今ここに、いのちをいただいでいなければ、涙は流せません。人は悲しみの中にあっても、自然と生きたいと願う、生き物本来のいのちの営みの上に、生活しています。

先ずは、今年もそのいのちを頂戴できていることに、感謝し、おめでとうの言葉をかけたいと思います。

さて今月の言葉は、正月だからこそ、私たちの行動について示唆を与えてくれる言葉を取り上げました。私たちが傷つき、悲しい思いをするのは、どのようなことによるものでしょう。

多くの場合、人との関わりや対人関係によって、心に傷を負うことが多いのだと思います。またその傷が癒されるのは、人との関わりによって、心が軽くなったり、快方に向かうことができるのです。これは、私たち人間というものが、一人のみにて生きるものにあらず、人と人が関わりあって生きていく人間存在の特徴を現しているといえましょう。だからこそ、人を傷つけるようなことなく、人を勇気づけたり、癒すことのできるような関わり方を、心がけて日々の生活を心がけたいものです。

それでは、具体的にどのような心遣いをしながら、生きていったらいいのでしょうか。お釈迦様の智慧をともし火にしたいと思います。お釈迦様は、人との関係性において、何も難しい事を言ってはいません。むしろ非常にシンプルな表現で、生き方を明示しています。「人にされていやなことは、決して人にしてはならない。人にしてもらって嬉しいことは、自ら進んで人にしてあげなさい」というものです。いかがでしょうか、幼い頃に親に教えてもらったのと、同じことではないでしょうか。

今年一年、こうした素朴なお釈迦様の生きる智慧を大切にしながら、生きてまいりましょう。 合掌

# 行き詰った時 境遇を 改めることより 心を 改めてみる

2010（平成22年）2月

---

「一つの職業を、長く勤め上げる」といったことを、あまり耳にしない社会になりました。昔は、石の上にも三年、などとよく言ったものでした。勿論、最近是不景気の状況から、勤めていたくても解雇されてしまうという状況もあります。しかし「働いてみたけれど、どうも自分に合わないから、自分に合うような仕事や職場を替えてみる」といった、様子で仕事を替える人が多いのが、実情ではないでしょうか。

こうした場合、自分に合わないから、自分に適した環境や境遇を改めるという発想が基にあります。端的に言えば、自分が満足できないのは、自分を取り巻く境遇のせいだと考えるから、自分に合うような境遇を選び、替えていこうと考えるわけです。職業を替えても、当座は食うに困らない、というのは、豊かな社会の表れかもしれません。一方で明日、家族を食べさせるためには、仕事が好きとか嫌いとか、自分に合っているとかないとか、悠長なことは言っていられないといった立場の人にも必ずいるはずです。

冒頭に掲げた言葉は、「替えられる自分」があるとするのならば、まず自身の心こそ、改めてごらんください、と教えます。自分に合うような境遇を探すのではなく、自分が境遇を作っていくことができるよ、それは心を整えていくこと、改めていくことだよ、と教えています。

「全てのものは心の造るもの」だと、教えられた方こそ、お釈迦様なのです。 合掌

移ろいやすきを

花といい

常にいますを

佛という

2010（平成22年）3月

---

坂村真民さんの詩を、今月は紹介します。

実は、この後の言葉があって「かなしいものを 人という」と続くのです。

三寒四温の陽気があまり当たらないように思う昨今ですが、それでも確かに、浄心寺の境内の桜も、花の季節に向けて、支度をしているかのようです。

花は、咲いては散っていく、移ろいやすきもののたとえとしてもあげられます。お釈迦さまの悟りの内容の、重要な柱となっている教え「ありとあらゆるものは、必ず変化していく」これは、諸行無常とよばれるものの顕れです。

しかしこの諸行無常には、同じ人間でも二通りあって、老いて死を迎え別れていくことは、諸行無常であり、子どもが日一日成長していくことも諸行無常です。死による別れは、なるべくなら味わいたくないものですが、勝手なもので子どもの成長は、なければ不安になるばかりです。

みな自分の都合で、喜んだり悲しんだりするものです。

かなうことならば、どんな出来事に会おうとも心穏やかに、ゆるぎない境地で、人生の波風に対処していきたいものです。大切なことは、世の中とはそういうものだという視点を持ち、変わりゆく世間の流れにこの足をつけて、流れに逆らうことなく静かに、自分の速さで歩いていくことです。

そのためには、杖が必要です。

どうぞお参りの心を、「常にいますを 佛という」が如く、いつも仏さまと一緒にいて、仏さまが常に守ってくださっていることを忘れず、仏さまと一緒に生きてまいりたいものです。

浄心寺の桜、

どうぞお参りかたがた、ご覧においで下さい。 合掌

---

浄土宗・浄心寺（東京都文京区）<http://www.jyoshinji.jp/>

Copyright © Jyoshinji. All Rights Reserved.

わたしは 傷をもっている  
でも その傷のところから  
あなたのやさしさが しみてくる

2010（平成22年）5月

---

これは、星野富弘さんの詩です。ご存知のことと思いますが、群馬県に生まれた星野さんは、大学を卒業した年に、中学校の体育の教員として着任し、指導中に宙返りを失敗して、脊髄と頸髄を損傷し、以後、肩から下の機能を失いました。9年間の入院生活の間に、キリスト教の洗礼を受け、人々の献身的な関わりのもと、口にくわえた筆で水彩画やペン画をえがき始め、後に詩を加えて発表するようになりました。現在もその、人の心を癒す詩や絵は、多くの人々に愛されています。

多くの人々は、幸せを求め、楽しみの中に生きていと願います。しかし幸せにあふれ、どっぷりと漬かった生活をしていると、私たちはどんな言葉を出すのでしょうか？多くの場合、「退屈だ」「もっと刺激がほしい」と、欲望を増上させていくのです。

星野さんのような大きな、半身不随の傷でなくとも、人間が生きる上で、傷をもつということは、優しさや、思いやりといった、幸せの一番大事な要素を感じる下地になるものではないでしょうか。

傷や痛みをもっている人こそ、人生の真実の優しさや、幸せを感じ、味わうことができるものです。お釈迦さまの教えになぞらえて言うならば、傷や痛みは、優しさや幸せを感じる「ご縁」を生み出してくれるものになるのです。

傷ついたり、心に痛みを感じたときには、  
こんな風に受け止めたらいかがでしょうか。 合掌

---

浄土宗・浄心寺（東京都文京区）<http://www.jyoshinji.jp/>

Copyright © Jyoshinji. All Rights Reserved.